

## 寛政の改革

元禄（1688～1704）期の絢爛たる文化の開花は、学問・芸術を進展させる大きな刺戟となり、また徳川中期以降における藩財政の窮乏は全国的な傾向で、藩政立て直しのためにも藩士の教育が重視され、各藩とも藩校の開設が進んだ。黒田藩の貝原益軒、柳河藩の安東省庵はともに儒学者として元禄期に活躍し、藩学確立の先駆をなした。幕府は元禄四（1739）年に昌平学を整備して朱子学を正学とし、各藩も朱子学を正学として藩校を確立していった。小笠原藩では元文四（1739）年石川麟洲を儒者として召し抱え、宝暦八（1758）年、小倉城西三の丸の内に書齋を創建して思永斎と名づけ、石川麟洲が儒学を講じた。のち天明九（1789）年、思永斎を学館として思永館と命名し、武術の稽古場を併設し、麟洲の子、石川彦岳を学頭に任じた。

文武の奨励、特に朱子学による思想形成は、封建的主従関係、封建秩序の強化となり、生産力や産業の発展から起こる封建体制の矛盾や、財政窮迫からくる封建制度の緩みを立て直し、藩政確立を目指すものであった。

しかしながら現実には、享保十一（1726）年以来、藩士からの禄米借り上げは恒常化し、家臣の生活は諸物価の高騰と共に、ますます苦しくなる一方であった。藩財政はそれにも増して苦しく、何とか打開策を講ぜざるを得ない羽目に追いこまれた。

ここに勝手方引受家老として犬甘兵庫知寛が登場し、かれの政治が一期を画することになる。犬甘知寛は安永六（1777）年、家老に列せられ、安永八年勝手方引受家老になった。勝手方引受家老になった犬甘は、これまでの家中からの掛米を改め、家格・禄高に関係なく、武家の家族・家来・使用人に応じて、一人について幾らという割合で扶持を給することにしたと伝えられている。

この制度は大禄者の知行をさいて、小禄多家族の者に与えることとなり、小禄者はこれまで諸物価の高騰にも拘らず、掛米として藩から借り上げが行われるので生活は極度に苦しく、武士の体面を保つことさえ不可能であったから、この犬甘兵庫の施策を喜んだ。

一方中流以上の者は禄をさかれる結果となり、従来の生活程度を必然的に低下せざるを得ないことになる。したがって中流以上の士は犬甘の施策に強い不満を持つことになる。藩庫はこのために残米を保有できるようになり、大いに財力を回復することが出来た。

犬甘はこの制度実施三カ年後には、これまでの掛米の一部返済を行うことにした。これはようやくやく高まった中流以上の武士の不満との妥協であったように考えられる。また犬甘は安永八年から、これまでの形ばかりの運上金を改め、藩庫収入の点を加味して、酒造業及び販売商、醤油製造及び売買、呉服商、質商、米雑穀商、薪炭売買、商人宿屋、魚類問屋、渡海船、諸入港船から運上金を徴集することにした。

これらの背後には商品流通、商業の発展があったことが窺える。

藩庫の充実は余力を生み、毎年十月に大坂に登って販売していた米を、米価の上がる十二月に登することに改めた。しかし藩庫充実の基本は米の生産力増大による年貢米の増徴である。これは新地開拓による耕作地の拡大ということになる。

犬甘は安永九（1780）年、田畑の拡充を図るため、開拓を立案し、大坂商人播磨屋から一万五千両、伝法寺屋から二万両の借入金をすることに成功し開拓の資金を得た。

この借入金は理由を設けて踏み倒し、遂に返済しなかった。犬甘は天明元（1811）年九月から新地の開拓に着手した。

即ち現在の小倉高等学校正門下付近一帯、日明新地と、紫川沿い常盤橋上流の東西両沼の埋築を開始した。

日明新地は天明二年春から手永普請に切り替えられ、翌三年春に完成した。紫川沿いの新地は藩の普請方の役所直轄で行い、三年秋に完成した。

紫川沿いの新地は二万三千坪におよび、旧造兵廠の地である。またこれと同時に、当時沼地であった馬借町西手裏一帯から、南は外郭土手下旧街道より藩の新舟入の防波堤にわたり、豊後橋東の橋台から小楢円形に住吉付近に至る一円の中島新地埋め立てを行った。これは郡代の一手引受けとし、企救郡惣手永の割普請で起工した。しかし天明二年

二月からは村々は播種期となったので、三月から町方引受けとなり、久松屋吉左衛門（質屋）、伊崎屋善四郎（質屋）、米屋弥吉（酔屋）、住吉屋音左衛門（酒造）の四人が掛屋（現金を預かり、度々指定額の金銭の出納をする）

この役目は身元確かにして資産のある者の中から町奉行が任命した）に選ばれ、日々交替で現場に出張した。

十一月から今村手永と町方の共同工事となり、天明三年三月完成した。新地開拓はその後も行われ、寛政四（1792）年には大里村庄屋、石原宗祐を起用して曾根（現在北九州市小倉南区）新田の大干拓工事を行わせることにした。

犬甘の事績は新田開発、殖産産業の奨励など見るべきものは多いが、既に普遍化した商品流通の過程から、運上金を増徴する施策から更に一步を進めて、村商品作物から年貢を得られた。寛政十三年（1801）に新地八〇数町歩を得て、竣工した。新地には農具を支給して新百姓を仕立てて住まわせた。

このように生産力拡充の基礎を築くと共に、農村人口の停滞、減少化の当時の傾向からして、全国的にも農民の他領転出を硬く禁じていたが、小倉藩では寛政十三年に田畑と作人との釣り合いが取れて余り地のないように新百姓を仕立てることを目標とし、まず小作人で増作出来る者には更に余分に作らせ、後家、独身者、諸職人、商人等で郡中に居住する者には多少に拘らず耕作させ、職人、商人でこれを拒めば免許札を取り上げて百姓に引戻す方法が採用された。

産業、主として米産の確保に力を尽くすと共に、一方幾多の風を戒める風俗制限令を天明六年に出している。

また殖産産業にも意を用い、細川藩家老、堀平太左衛門の指導により櫛の栽培を奨励した。犬甘の家老就任以来の施策に対する上層部からの批判には、その不満を抑えるのではなく、守旧的勢力の如何ともしがたい強さは改革を阻止し、それとの妥協のもとに財政の確立と利益をもっと直積的に「藩宮・専売制など」藩が抱合する方向に進み得なかったことが、結局への誅求の深化以外に術がなかったのである。

ここに於いては、犬甘の施策の成功と農民の生活改善とは反比例し、農民は窮地に追い込まれ、泰平の世の中で遊民化している家中の者に、上に厚く下に薄く賞与銀を与えて、施策に対する批判を抑える為の妥協策を採らねばならなかったのである。

特に寛政六（1794）年に発せられた「御建替仕法」による本百姓保護政策も、貢租確保を基底とするもので、本百姓以外の負担増となり、運上銀の増徴、商人からの借金の踏み倒しは、犬甘に対する不満を大きくしていった。そして現実には農村人口の減少が顕在化した。犬甘の施策がその線の堂々廻りに陥ったとき、もはや犬甘は職を退く以外になかった。

享和三（1803）年、犬甘は遂に藩政素乱の理由によって蟄居を命ぜられ、企救郡頂吉の石牢に幽門され、そこで没した。

## 〔頂吉獄舎における兵庫の生活〕 筆者・頂吉の住民

兵庫の入獄は享和三年一月六日と記された記録が多いようで、文化元年二月二十七日死去するまで一年二ヶ月余りの獄舎生活と考えるべきであろう。

その間の生活状況についても記録は全く残されていない。只、兵庫の朝夕の食事や身廻りの世話を命ぜられていたと言う獄舎の隣に住む山口某を中心に村人達に語り継がれて伝説のような形で今に残る二、三の事項によってその概要を知るのみである。

村人は兵庫のことを（お職様）と呼んでいたようである。

他藩という城代家老と呼ぶ職名は小倉藩には無かったようで藩主に次ぐ最高の権力を持つ職を執権職と呼んでいたので執権職様と言う意味であろう。

お職様体格頗る勝れ、又、少しも高ぶる事なく気安く村人達に話し掛けていたそうである。寒い冬の夜長など、兵庫はよく隣家を訪れ囲爐裏の焚火にあたりながら雑談し又大変子煩悩で隣家の幼児を抱き取ってあやし興じていたという。

（お職様、今夜は大変寒いからこのまま、囲爐裏の側で寝ませんか）と勧めても、（イヤイヤ私は罪人だからさような気儘はゆるされぬ）と言って帰っていかれたそうである。

死去の日も兵庫様が朝起き出て来る様子がないので、山口某が朝食の膳を携えて

(お職様、お職様)と外から数回呼んだが返事がないので、中をのぞくと部屋の格子壁にもたれて正座したまま死去されていた。兵庫様は常日頃紋着きの衣服を着ていたので美しい死装束であった。

村人達が建立した碑石を兵庫様に淋しがらせないようにと、大正九年碑石の規模を拡大し周囲に修行大師や不動明王等の石像を祀り十三佛を配し、一牢の堂も建立して霊場としての様子を整えた。

毎年八月十九日夜は供養の盆踊りを催し旧門司市からも茶菓子や清酒の接待などもあって、盛大な供養法要が終戦近くまで続けられた。

現在地元町内会婦人部の人々によって毎月一回の清掃献花が続けられ、故人の慰霊が行われている。

犬甘兵庫知寛の失脚と、文化の変のヒントを得て、大坂の劇作家奈河清助が「濃紅葉小倉色紙」と題する脚本を書き、文化十三(1816)年大坂で芝居を上演した。

これは嵐吉三郎の当たり芸として、京坂はもとより江戸でも度々上演された。明治の中期に大坂で勝能進、竹紫諺藏の父子がこれを改作して※小笠原諸礼忠考※と題して広めた。

この芝居で見る限り、犬甘知寛はお家乗っ取りの極悪人として描かれている。小笠原藩にとつては反犬甘派が政権を確保していくためには、犬甘が極悪人である必要があったし、そのためにこの芝居は一つの役割を果たすものであった。

文化の変は結論的に言えば、犬甘知寛の施策が歴史的発展の流れに沿って徹底的に追求し得られなかったところに原因を求むべきであろう。

犬甘が藩財政の確立の為に採った諸方策は、困窮のどん底にあった下層武士を一応は救うことができたが、その過程において、この封建制の中でアグラをかいて座っておられる上層部の人々※これは封建制の永続を願うであろう※、守旧的勢力の強さの前に妥協せざるを得ないこととなり、そのことは結局、最下層にある農民・商人へと負担が転嫁されてゆき、それが生産を阻害し、商品経済の発展を抑えることになった時、犬甘は職を退かねばならぬ必然のもとにあった。

他藩では既に、長州藩では寛永年間(1624～44)に紙を、明和年間(1764～74)に藍を、黒田藩では元禄年間(1688～1704)に塩を、寛政年間(1789～1801)には蠟を、薩摩藩では寛政年間に樟脳、七島表、文化年間(1804～18)に紙を、白杵藩においても同じく文化年間に塩を、それぞれ統制化に置き、専売制度を確立している。

隣接諸藩のこのような時勢に即した状況にも拘らず、小笠原藩ではようやく寛政年間に至って櫨の栽培を奨励するという遅れた有様だった。

犬甘によって基礎づけられた商業的農業の萌芽を、その後の藩権力は、その中に

抱合して育成し発展させると言う、西南雄藩のあの藩力培養をなすことなく、守旧勢力の強さが反ってその萌芽を摘み取ることとなり、このことはやがて幕末維新に際し、小笠原藩を辿らしめた暗いコースを、既に布石することとなったのである。

改革三人衆より抜粹

## 最後の藩都

応二年（1866）七月三十日、第二次長州征討線に敗色を見た小倉小笠原藩は、惣軍議を開き、前線を南方に下げ、戦鬪に有利な地へ布陣することを決めた。く八月一日、藩士の屋敷に火を放ったのを合図にして、小倉城を自ら焼き、金辺峠と狸山に陣が敷かれた。

その後も一進一退の戦鬪が繰り返されたが、十月十一日に小倉側が止戦の申し入れをしたことをきっかけに、講和の話し合いが始まることになる。

この、止戦の申し入れを目前にしながらも、いまだ激しい戦鬪が続いていた十月四日、郡代杉生募以下三十数名が、京都郡及び仲津郡の農村地帯を見分に訪れている。

—史料—

奉行所始め、御普請奉行、御軍議役・緒方繁右衛門、門田栄其外役々都合人数、左の通り御城地御見分のため、明四日朝、稗田出立、仲津郡錦原迄御越し、(略)

十月三日夜岡村権兵衛  
和田卓蔵様

中央では、慶応三年（1867）十月十五日に、朝廷が徳川慶喜の大政奉還の奏上を受け入れ同年十二月九日には、岩倉具視、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允といった討幕派が、摂政、関白、幕府を廃止し、総裁、議定、参与を設置すると共に、神武創業の古（いにしえ）に復するという理想を標榜した。

—王政復古の号令—を発した。

慶応四年（1868）一月三日の鳥羽・伏見の戦いから、戊辰戦争がはじまるが、四月には江戸城が開城されるなど、名実ともに江戸幕府は倒されるに至った。

元号が慶応から明治に改元となったのは、九月八日のことであった。

慶応二年（1866）十月に見分を行って以来、新しい藩庁造営地の選定の作業はしばらく中断されていたが、明治元年（1868）十一月、其の決定が行われることとなった。

新しい藩庁造営地は、藩士百十八人が封筒で入札する形で行われた。

入札の結果は百十八人の内、—錦原—とのみ記した者四十八人、錦原とその他の地名を併

記した者十人で、

全体のおよそ半分を占めている。錦原に造営地を選んだものが多かったのは、

※ 標高三十〜八十メートルの台地で、堅固とは言えないまでも、要害の地であったこと

※ 今川、祓川の水運が利用でき、沓尾などの港も比較的近いこと、天保時代に開発が行われ、町としての形が、ある程度整っていたこと、などが考えられる。

それにしても、この時期、新たに藩庁を造営する資金的な見通しを藩が持っていたとはとても考えられない。

藩は既に江戸時代中〜後期には慢性的な財政難に苦しんでいたが、幕末期にあたり、対長州の軍備増強などのため、日田商人からの借金や、それら商人を仲介とした日田郡代役所からの借金やなどが、莫大なものになっていた。

また小倉城自焼の直前に藩財産の持ち出しが行われたであろうが、

※例えば御内証金一万八千両余の持ち出しは慶応二年七月晦日に行われた※、

それにしても、小倉を放棄した損害は藩にとっても、藩士にとっても軽いものではなかったであろう。

さらに、慶応四年（1868）二月、徳川慶喜追討の命令を従う為、四百人以上の藩兵を出役し、八月からは、奥羽列藩同盟征討の為、千人以上を出陣させている。

こういった出費のため、新政府からは多額の借金をし、また藩士らの家禄を削減するなど、藩財政の運営に苦慮していた。

こういった状況の中での藩庁造営は、最初から困難を覚悟の上だったであろうか。

それとも当初から、後述する商人たちの財力をあてにしていたのであろうか。ともあれ、新たな藩庁は仲津郡錦原に造営することで決定した。

明治元年（1868）十月、新政府は各藩まちまちだった職制に統一的基準を設け、藩主の下に執政、参政、公議人などを置き、藩議會を設け、藩の行政と藩主の家政を分離することを進めた。

これを受けた香春藩では、十二月十五日家老職廃止の上、執政とし、その職に島村志津摩、小笠原織衛、小笠原内匠、小笠原甲斐、丸田秀実の五名を命じた。

慶応二年（1866）八月一日の小倉城自焼によって、多くの商人たちも城下町を離れて、領内各地へ逃れていった。

例えば、仲津郡大橋村には小倉京町四丁目の豊後屋、重持屋、西魚町の小串屋、紺屋町四丁目の広屋など十六人の商人が、また京都郡行事村には魚町二丁目の釜床屋、

京町八丁目の油屋、室町二丁目の紙屋、船頭町の帯屋など。

十二人の商人達の中に、田川郡香春に住んでいた中原屋が有った。中原屋は毛利氏の家臣・中原五郎七が慶長年間（1596－1615）に豊前に移り住み、次代の中原嘉兵衛が小倉新魚町に店を構え、諸国書状取次ぎを生業とした。

以後、代々の当主は嘉兵衛を名乗り、六代嘉兵衛の時に室町二丁目に転居し、七代嘉兵衛の時には商人として確固たる地位を確立したと言われている。

幕末から明治前期に生きた中原屋・中原嘉右衛門は、小倉城自焼後香春へ移り、家業を営むと共に、藩から町年寄当分取計を命ぜられていた。

又さらに、慶応四年（1868）五月には商法方御用掛を、明治二年（1869）一月には会計局小頭試補に任じられ、主に財政の面から、藩政に深くかわり、明治元年（1868）から始まる藩庁造営工事にも、商人としての立場を超える役割を果たした。

次弟の米屋（田中）義次郎は明治二年九月十一日に、三弟嘉平は明治二年一月二十四日に、それぞれ町年寄当分取計を命ぜられ、藩庁及び関連施設の造営に中原屋一族の果たした役割は大きかった。

藩庁及び関連施設の造営工事に尽力した商人は、なにも中原屋だけではない。行事村の館屋は、育徳館の建設に七千両を投じ、同じく行事村の堤家は民生局の建設を担当した。

明治元年（1868）十二月二十四日から始まった藩庁と関連施設の造営工事及び町家の建設工事は、明治三年に（1870）末までには、ほぼ藩都としての体裁が整った。

豊津には小笠原織衛（執政、家令など歴任。千五百石知行）の邸宅があった。

ただし、この建物は、天保年間に御本陣として建てられたもので、後に仲津郡山奉行の役宅として使用されていたものである。

新政府は明治二年（1869）六月十七日から二十五日にかけて順次、各藩から提出されていた版籍奉還の建白を許可し旧藩主を改めて知藩事に任命したが、これによって、藩主らは政府が任ずる地方行政官となった。

それ以後も知藩事の権限は縮小され、藩の独自性、自立性を奪う施策が採られていった。明治四年（1871）四月の太政官布告によって新軍制の整備が進められ、東京に薩摩、長州、土佐の藩兵、およそ一万人を集めて天皇の親兵とし、これらの、軍事力を背景に、政府の中枢を西郷隆盛、板垣退助、木戸考允、大隈重信らで固め、七月十四日在京の知藩事を集めて廃藩を命じた。

これによって、それまでの府・藩・県制は廃止となり、全国に三府「東京・大坂・京都」と三百二の県が成立することになり、豊津藩も豊津県となった。

## 堺利彦日記

堺利彦は貧乏士族であった。明治三年十一月二十五日に生まれ、明治十九年春まで、福岡県豊前の国、京都郡豊津で育ち、その間に郷党の秀才として、小学校、中学校を卒業し、それから笈を負うて、東京に遊学した。彼の生涯、第一期の歴史は、要するにこれだけだ。彼はまずその性格、体格の根本を、その環境から作り上げられた。

豊前六郡十五万石は小笠原家の所領であった。

小倉がその居城であった。然るに慶応二年、徳川幕府長洲征伐の時、幕府の親藩として、九州方面の先手を承った。

小倉藩は戦い利あらず、城を焼かれて退去した。そして新たに地を豊津に相して、そこに城を築くことになった。

伝説的な我が豊津の瘦せ松原は、かくてまた一つの珍しい大きな運命に遭遇したのである。ところが、間もなく幕府が滅びて慶応四年が明治元年と変わり、引続いて藩籍奉還、廃藩置県となったので豊津の城下は未完成のまま、まだほんの荒ごなしのまま、新時代の雨風の中に放り出された。

そこに豊津の特殊性がある。堺家は元十五石四人扶持という小士の家柄であった。

堺の父はまず、御書院番、次に御鷹匠、それから検見役、最後に御小姓組を仰付けられたと、系図に書き残してある。

私の父が既にサムライでないと同じく、豊津は既に城下でなかった。殿様と呼ばれた旧藩主は既にこの地方を引き揚げて、東京住居になっていた。

お城とは言っても子供の目に城という感じを与えるような、高い石垣もなければ櫓のような物もない、ただ平地に建てられた、やや大きな構えの御殿に過ぎなかったが、其のお城は、一部分は既に取崩され、一部分は閉め切ったままになっており、中ほどの一部分だけが仕切られて、小学校に使われていた。

其のお城を中心として、松原の間や谷あいに沿って、士族の屋敷が群集し、あるいは散在していた。

本来なら城下の屋敷町であるべきはずが、全て松原と谷あいとであった。

昔の山城を鷲の巣にたとえた話を聞いたことがあるが、その格で行くと豊津の士族屋敷は鳥の巣と言ってよかつたらう。

しかし、お城の辺を頭として、それに続く一条の大通り上手の部分は本町と呼ばれて西側には士族屋敷が規則正しく立ち並んでいた。

其の中には松の門、あるいは松の御門と呼ばれた、御家老小笠原織衛殿の老松竹林に囲われた、大きな奥行き深い屋敷もあつたりした。

私の親類は大抵小士であった。中で、二月谷、志津野（母方）だけが格式が高かつたそうだ。小倉藩では百石以上をお歴々と称したが、二月谷志津野は即をそのお歴々の最低位



であった。

私は藩内の御大家について、ほとんど知るところがない。

ただ前に記したご家老の松の御門だけは知っている。その若さんの安三郎という人は心易くなっていた。

細い髪の毛の美しく縮れているところと、温和で、上品な顔付きをしているところが、我々とは少し違っていた。

ある時、私はどうかしたことで、その裏庭にいつていて××院様という御後室から話し掛けられたことがある。其の時××院様が「お前の内では」と言われたので、なるほど身分が違うのだなと思った。

但しそれを不快に感じたのでは勿論なかった。十三の春、私は豊津小学校を優等で卒業した。中学校は元の藩学育徳館、私の入った時には県立豊津中学校。

台ヶ原という平野の一隅にある宮殿式の建物で高い竿の上にホラフが掲っていた。

私は入学願書を持って初めてそこに行った時、実に堂々たるもだと思った。

「何でもこのごろは二百人から生徒があるそうじゃ」と母などが、驚き顔に話していた。当時豊前の国（旧小倉領）にただ一つの中学校だった。

## 秋月の乱

美夜古文化合本

豊津の松の葉は色濃やかである。人気のない日差しを通して、颯々と鳴ると、虚空高く柔らかな微光が針をもむようにざわめいて過ぎる。今年の八月三十一日であった。私は、豊津高校の教官中村静雄氏と一緒に上豊津に丸田邑（むら）さんを尋ねた。邑さんのもと家老小笠原織衛の娘で、明治三年三月二十六日に生れ、今年で丁度八十五歳になる。私達は、この人について、昔の思い出話を聞きたいと思ったのである。

秋蟬が鳴いている。閑静な夏座敷を開いて、邑さんは団扇を持っていた。清潔な白地小柄の浴衣を四角に着て、切髪に、品の良い美貌な顔立ちである。八十五歳とは到底思えない、中柄で、足腰も達者、言語も明快で、ことに記憶力は大変正確のように思われた。まことに、以外であった。私は、気品のある血統さえ感じた。以下その時、私が畳みかけて尋ねた質問に、一つ一つ、にこやかに答えて下さった邑さんの思い出話である。

「秋月騒動など、覚えていられますか。」

「そうでございますね。何分私が物心ついたのは五、六才位ですから。父などが香春から豊津に移り、御内家の家令をつとめていました頃、私は生まれましたので・・・。それ

でも、少しは記憶しています。」

小笠原織衛は、藩主の連枝で、代々老職の家柄であった。丙寅の役には六番隊長として、大里、狸山で戦い、次で香春藩の家老となり、慶応三年の正月四日に上京して、以来その年九月三日まで京都留守居家老をつとめた。秋月騒動の時は御金蔵番をつとめていて、暴徒と激論したが、ついに御金蔵の鍵だけは渡さなかったという。

明治十一年十月十一日、あたかも小笠原神社造営祭典のその年、織衛は五十三歳で亡くなった。邑さんの兄には、美太郎さん千二郎さんと云う人がいたが、妹も二人いたそうである。まちさん、まささん。

まささんは八十歳の高齢で、やはり大阪に元氣にいられるそうである。邑さんの姪に、小笠原龍さんと云う娘さんがいた。私も少しは記憶している。

邑さんは、勿論、後に丸田家に嫁いだ人である。

「はじめて私達が銃声を耳にしたのはお昼過ぎで、丁度、小倉鎮台が到着した時でしょう。十ばかりも本町の下手から聞こえてきて、そら戦いだと云うので、母や六才の私や、兄弟やあわてふためいて、御内家裏手の道を荒谷に逃げていきました。すると、母が急に私達を片側に押しつけ、袖でかばうようにしましたので、ふと、下を見ると、血みどろな親指と小指が二つ切り落とされて、道に転がっていたのです。幼心におびえたのを、今でも覚えています……。」

秋月党は、白の旗を沢山翻し、おりからの強い秋風になびかせ、法螺貝陣太鼓を叩いて氣勢をあげた。約二百五十名であった。育徳館に押し寄せたのは、明治九年十月二十九日の正午頃であるが、その前日二十八日に、秋月士族土岐直澄、鈴木安香と云う者二人が育徳館に来て、杉生十郎に会いたいと申し込んだ。

杉生十郎は、秋月党に合流して、萩の前原一誠に呼応しようとした、いわば、彼等の同志であった。豊津の藩論は、杉生等の意見に反対であった。それで、校長入江淡、石川巖太郎が土岐等と応接した。

その時、秋月党の主力は、すでに油須原まで来ていたのである。二人は、失望してその日は油須原の本隊に帰っていった。果たして、翌二十九日の昼頃である。

秋月側は大挙して台ヶ原まで陣を進めて来て、にわかには我に蹶起を促したのであるが、生駒九一郎や、入江淡等には、その前夜、二十八日の午後十一時に、乃木將軍の第三大隊と、第四大隊と、合計六百名ばかりが、すでに小倉を出発したという知らせが内々に入っていた。

そこで、故意に淡は無用の問答を繰り返しつつ、時期をゆるめて、乃木軍の来援を待ったのであった。乃木軍の豊津到着は一時、ごろである。

「旧秋月藩豊津に侵入戦争次第併手負賊討取捕縛人名御届書」によると、敵の遺棄した死体十六名、捕縛したもの、豊津付近で、七名、彦山落合村で三名、添田で一名、上赤村で一名、合計で十二名であった。

又我方、重傷後死亡一名、手負い数名であった。

「杉生さんは何でも、その時お味方が育徳館に押しこめて隠していたそうですね。騒ぎの初め、生駒九一郎さんが、二月谷で秋月党とすれ違いましたところお前は誰か、と詰問しますので、生駒主税だと答えて知らぬ顔をして通り過ぎました。すると、ふんと云って通してくれたそうです。」

九一郎さんが、主税であると言うことを、皆さんご存知なかったのでしょうか。ホホ・・・」  
邑さんは笑う。生駒九一郎は、藩論をくつがえして急に秋月撃攘に話を決めた藩の有力者であった。「打止景況」と云う当時の報告書綴りが別に今一冊あって、それにはその日の同胞殺戮の修羅場が事細かに記録されている。荒谷の荻田の泥中に転げ落ちながら死闘したものすごい場面も出ている。しかし、この哀れな秋風齧殺陣も、その日二十九日の午後七時頃には、すべてが終わっていた。

「豊津の町が一番栄えたのはむしろ、明治二十年頃から十年ばかりの間でしょう。それはね、遊廓まで出来ましてね、ところは、もと監獄のあった錦町七丁目角のあたりだったと思います。」

豊津に移住して来たのは、小倉の御家中ばかりではなかった。小倉や椎田や八屋方面の商家の人々もたくさん移住して来た。又、杉山さんや、勝平八郎さんの家のように香春に残った家もあった。

「廃藩置県後は御扶持には離れるし、八隅正名さん方が、養蚕を奨励されたりして、四ヶ所ほど製糸工場を開いたり、後には、小倉織、博多織の工場まで小仕掛に出来たりしたこともありました。漸盤社と云う養蚕所が一番大きかったようです。だけど、それ、士族の商法と云いましてねホホ・・・」

自分たちの着物が出来た位が、せきの山であった。その他、茶、紅茶、麻等も作った。「風俗の長い明治のことで、次第にかわりましたけれど・・・」

さすがに女性で、風俗になると、邑さんの話は面白かった。明治初年は、藩士と商家ではその女たちの髪の毛の結い様にも差別があった。

格式家中の奥さんや御新造さんは、「片はずし」と云うのに結った。

お芝居の政岡に似た髪である。又「御守殿髷」と云うのもあった。下仕或は商家では大抵若い女は「丸まげ」であった。

しかし、皆一本筭、或は玉入かんざし、平櫛等もただ一本しか許されず、華やいだ髪飾りは一切禁じられていた。

明治二年十二月二十五日お触れ出し。

- 一、婦人ノ衣服ハ総テ其主人ニ準ズベシ
  - 一、白無垢ハ準中士以上之婦人着用許之
  - 一、髪指物ハ、鬘甲、水牛、金銀、めのう、さんごノ類之外、右ニ準ジ候品、并セテ紛敷品一切禁之
- 但、執筭之外指物一本限タルベシ

- 一、髪掛、襟等縫取類并せて綿絹共鹿ノ子絞りノ類一切禁之
- 一、日傘ハ士族以上ノ婦人小児許之其以下ハ白一重張ノ日傘許之

娘たちは、やはり「桃われ」「高島田」等結った。若い娘は、「ちご髷」

「おしよぼ」が多かった。「おさげ」と云う髪様は、ずっと明治も後代に流行したものである。男は、始めは「ちよんまげ」明治二十年頃には、一樣に「じゃんぎり」に変わった。服装は、格式では普段着が紬、よそ行きには、お召し、銘仙位は許された。一般には大抵手織木綿が普通であった。色柄も非常に地味で、若い女でも、鼠、黄、茶、黒等の小紋か、霰、或は縞柄を用いた。それでも、娘たちは、少し色めいた大きい縞柄を用いた。又若い娘は、「ひぶ」を着た。

「赤い色合いなんか、見ることも出来ませんでした。もつとも、格別の時の御襦袢などは別ですが。」

明治二年十二月二十五日

- 一、衣服ハスベテ木綿晒布ノ類タルベシ
- 但、帯ハ絹毛織ノ類丈夫ノ品ハ苦シカラズ
- 一、絹衣ハ差遺候品タリトモ、紋服之外ハ禁之
- 一、袴ハ糸入ノ分ハ許之
- 一、下着ハ、綿絹ヲ不分トイエドモ時勢ニ応ジ質素ニ基クノ義、銘々其心得可為
- 一、等外ハ、絹類一切禁之、尤、帯ハ紬太織之類ハ許之
- 一、毛織ハよせ板、呉呂服之類迄許之
- 等外ノ隠居ハ六十才以上絹下着ヲ許ス

育徳館の学生は、大体に、小倉袴に黒羽織で、羽織のは白黒よつた長い打中には威勢をつくつて首にかけ、両刀は差さず、棒だけは持っていた。下駄は低下駄、肩を振り、蛮声で詩を吟じ、大いに気取つて錦町界限を闊歩する者もいた。

「そうですね。よくは思い出せませんが、四角帽、洋服に変わったのは、明治二十四、五年頃ではなかったでしょうか。」

角帽に変わったのは二十二年頃であった。洋行帰りの忠忱伯が、御内家に入江校長を招いて欧州の話をし、今後の学校教育には是非英語の必要を説いたことから、急にアメリカ人ハツパードを高給九五ドルで豊津中学に雇うことに決定したことがあり、その時入江校長の希望で、同時に忠忱伯の考案したのが、角帽とその紋章であったという。

洋行帰り、ハイカラな殿様は、ケンブリッジの学帽を、そのまま模して、お国中学校の制帽と決めたのである。

「ハツパードさんは、始めは、豊津本町の志津野織右衛門さんの屋敷、もと管轄局のあった、今の大羽さんの屋敷に住んでいたが、後には何でも、学校の中に洋館が出来て、

そこにお移りになったようでした……」

郡長政の話。堺枯川の話。話の花は、それからそれへと尽きない。

しかし、何時の間にか夕うずいて、ツクツク法師がすぐ頭の上で、やかましい程鳴きぬいている。二、三時間もいたであろう。松の風が吹く。旧屋敷町の崩れた土塀の日影も長くのびている。さびしい風である。

名残は尽きないが、中村教官と私は、そこで一応あつく邑さんに礼を述べて、上豊津の丸田家を辞去した。

昭和三十年五月二十五日記

## 「家令」

明治以後、皇族、華族の家で家務会計を管理し、他の雇い人を監督した人。  
律令制で有品の親王・内親王、職事三位以上に与えられる公的家政機関の長官。

### 小笠原藩資料

## 小笠原藩（豊津県）ゆかりの人々・明治三年

小笠原織衛	丸田秀実	犬甘秀夫	二木政佑
嶋立七蔵	長坂源太	平井淳磨	小笠原長祚
清水潜	喜田村修蔵	入江淡	八隅矢柄
牧野郷三	富永屯	小笠原長熙	那須何衛
春日 衛	上条享	島村志津磨	小笠原此面
原善七朗	中野一学	福原晋	宮本左織
渋田見新	小宮親茂	小笠原長国	鹿島昶
大羽政貴	三宅五蔵	志津野拙三	福興（与）平造
二木茂	富永方雄	緒方潜蔵	佐々木五郎
山口茂樹	葉山先	平松浄江	松本韜蔵
鎌田英三郎	浦野又四郎	高橋忠衛	伊藤余太郎
小笠原甲夫	中野沃	佐々木国香	松崎 轍
市川東馬	馬場功	二木政貴	藤江環太郎
秋元収	大輪熊太郎	渋田見奥衛	岡 出衛
生駒九一郎	原宇兵太	佐脇四郎	西玄理

高田作衛	平井節藏	志津野肇	栗原正人
山口久藏	余悟左内	渋田見寛	野島糺
香坂辰二	深谷小太郎	豊田良之助	大脇幹八
川関静衛	三溝逸八	水野源六	小森平馬
山内雪江	田代郁彦	鱒淵潜藏	葉山蕃
鮎川篤太郎	鹽三栄	北沢蕃三	田中達三
広瀬真微	塚田多門	遠山清	横山源太郎
関又三郎	山内平	笥圓太	
渡辺弥五郎	中川潔	鷺見与	松下弥次九朗
佐々木照人	石地省三	平松栄藏	高橋種生
後藤又太郎	八田収	村岡松太郎	犬塚弥太郎
花見伸六	竹林岩次朗	奈倉徳三	小笠原巽
矢島津盛	渋田見源吾	葉山半藏	杉生募
依田市郎右衛門	大池襲馬	勝野兵馬	茂呂三郎平
伊藤五郎	稲田清藏	三澤淳夫	二木重三郎
友松直造	平林鉄藏	桃井三六	山崎蒨
山路熊次郎	進弥太郎	里見義	柏木五郎
小笠原弥三郎	横山丹吾	常盤藤吾	平瀬八郎
原治平	原千末	桐原村主	田中一雄
山田登一郎	小沢正衛	岩田小十郎	木村晋吾
河野於克彦	大八木熊五郎	小笠原熊雄	西田庄三郎
神田蕃三郎	吉澤正雄	依田源三郎	征矢野甚三郎
小笠原平馬	沼田是三	海津殿衛	青木興七朗
山下和雄	岩岡勝三郎	関信衛	原与一郎
伊藤基	香坂力	大日向武人	二木生
本多利吉朗	吉田又彦	黒部六郎	宿久武夫
伊藤惣記	平井勝馬	加賀美藤太	葉山荒太郎
徳長吉太郎	原育治	原喜一郎	小林修治
天野八次郎	海野一衛	市岡琇造	上条藤太
小笠原源太郎	土方兵次郎	小畑勘	大池螻二
佐野乙次郎	岡野五郎	青木専太	奥七朗
二木猛雄	宮本亘	加藤正	平林保
上野市太郎	伊藤半九朗	喜田村三郎	林栄治
北野俊太郎	志津野栄吉	秋山信夫	森戸直江
山田謙次郎	陣彦太郎	二木七五三	朝比奈此面
猪飼銓太郎	茂呂於吉	青柳喜藏	山崎政次郎

林嘉治馬	中西齡吉	篠原正	平林正樹
富永万次郎	杉村悟	山路小文治	犬甘九八郎
和仲八郎	相川 晰	大塚英治	香坂一造
岩岡泰蔵	中川 疑	柏木武比古	絹川甲
横川著	高田治	島村礪太郎	平塚喜六
内藤松太郎	佐々木記	小原八郎	柏木勝馬
岩田半弥	宇佐美新	遠藤平八郎	廣木狷三
山本武男	高橋源三郎	飯森邦衛	菅野十郎
青木政衛	保高正記	下枝觀一郎	横川大記
矢島六記	高橋兔尾	岡村新	高田平太郎
原 蘆水	伊藤卓馬	伊藤鉄三	三宅直江
奥小源太	吉田齡吉	原 劣	藤田源吾
米田耕平	大池太七朗	丸山 参	原平七
田辺永太郎	赤澤理	家原且	山田宗七
福原文太	澤渡敬吉	高田吉岳	大塩勉
荒木秀順	三村 斗	小野文平	日置彦七
岡田奥三郎	佐々木岩三郎	増田幸三	杉生十郎
藪正一	今澤小伝	二木五十枝	堀喜太郎
安井政太郎	黒部民蔵	中西極人	岩垂賢
堀内徳植	田中武彦	岩垂茂	下村改蔵
平林勝蔵	西田直樹	西村簾太郎	有川壯次郎
吉田鋭次郎	百束照彦	大羽源吾	武中栄三郎
鍋山静夫	百束兵七	湯川宗次朗	山本清人
林源治	山田権六	小河原泰	内藤 与
徳永勝馬	勝野惣馬	生駒三郎	葛西□蔵
佐野新平	石川志津衛	和田太郎	川口 行
矢島小四郎	井狩景次	野口文治	福興(与)三四吉
下枝敬義	加藤讓	野口虎二	岡村武平
宮原広太郎	津田隅衛	大石半蔵	岡庭繁
北村作蔵	野口 叶	宮城勇	後藤栄
並川嘉平太	仁科遼	福興(与) 赴	細野狗勝
鈴木事	勝野節	八田知義	山田嘉一郎
西武男	平沢□蔵	小室守也	伊藤岩太郎
勝野貫太郎	岡本操	明石与四郎	渡邊 秀
澤田藤蔵	上田 新	葉山小源吾	生島正蔵
島国衛	小野平蔵	松室義左衛門	遠藤祐太郎

湯川源九郎	花見規矩彦	小澤 島	内山虎彦
丹羽省	山口徳兵衛	巨知又六	朝比奈正夫
岩附源三郎	二木門治	高田衛門七	光逸雄
小池甚三郎	大堀仁太郎	伊藤勇	二木貢
葛西邑	柏木弥十郎	大池直樹	河合満衛
佐々木加太郎	門田栄	柏木 仲	近藤瑞枝
下条六郎	花房多仲	山室栄蔵	妹尾 収
和田虎雄	漆戸盛衛	大森 圓	大森閑蔵
古市宗理	後藤玄勝	香月拙造	筒井達夫
土屋良策	松井玄橋	加賀美安宅	西虎寿
高橋渡人	進由哉	山上繩庵	井口土岐伝
大島 緒	吉村文四郎	岡市蔵	湊小三治
石井省一郎	丹村壯太郎	有山喜三	山田源五郎
延塚藤九朗	村上 与	細井彦蔵	小出時三
永井俊蔵	鈴木彦之丞	辻村甚次郎	香月彦衛
馬場尚介	熊谷宿直	青柳彦左衛門	小松幹三
後藤駒次郎	佐藤半蔵	廣瀬真徹	松島一郎
森友力蔵	芝尾新五郎	小関小次郎	小林静蔵
小澤武雄	山本三代蔵	田中達三	加来才一郎
小島刀根蔵	大村専三	和田卓蔵	酒井鉄五郎
荒牧権次郎	三浦治	多田丈庵	内海意叶
堀井研蔵	原玄澄	大東庫太郎	金生茂
中村千治	三村市十郎	加来直記	栗屋藤五郎
井上吉十郎	飯尾武一郎	渡辺庄七朗	三谷嘉平太
兵藤真雲	井川小平太	吉田九朗	吉村栄治
勝平八郎	平尾 央	石川厳太	平井清司
鈴木仙三	井上与三	小澤又四郎	沼弥馬蔵
常盤二三	福西孫次郎	福田兵次郎	内藤登
岸本素波	河井小藤太	井上三郎	杉生兵吉
伴 誠次郎	尾倉勘太郎	島村勇	奥 吉三郎
内田和太郎	長野九郎	松枝 束	小寺藤三
浜島藤四郎	柴田克巳	加藤小平	高山静治
柳瀬有太郎	里見正夫	鈴木平二	水野貴富蔵
加藤 逞	米田一雄	諏訪伝次	白澤要蔵
赤川十郎	小野正三郎	上肥丹六	香坂莊右衛門
由良源三郎	堺得司	宗源吾	大石操



江頭六郎	增井六郎	岩村甫	花見伝蔵
中島重彦	大井熊蔵	継橋守彦	下村新次郎
宇津木源三	下村甚蔵	水上次郎	小室階
平緒小一郎	重谷文蔵	鳥羽元次郎	松田和七朗
島田彦造	磯野徳次郎	小出佐七朗	岡寛
田代儀平治	菅田七十郎	大森常七	成瀬五郎平
岩崎庄次	下条文太郎	柴田平三郎	市岡清蔵
間宮千吉	福島半	三島東蔵	小島涓蔵
本野一雄	小村門治	時枝永五郎	稲垣棟太郎
谷頭滝弥	林太久蔵	阿部憲蔵	村田徳次郎
觀興寺七衛	代田常蔵	幾野繁	神崎半六
山名虎毘吉	小林種七	児崎栄次郎	竹林十平
木島権平	廣瀬三津留	金生久次郎	市村庄七
中山数馬	田代弥十郎	山田清一	山崎直三郎
広木曾平	絹笠清	酒井治平	宮部善彦
白石彦蔵	高田与八郎	川関宗三郎	青柳二郎
浜口恕市	森友勘三	松本伝太	八田武平治
佐藤茂	樋尾林蔵	河合寿三郎	松田寿太郎
浜島清之助	荒木新	岡橋昇	島田勘平
荒木平太	香野専蔵	廣瀬桂	小宮重蔵
松崎正夫	福永久	進易次郎	木島真造
大岡辰蔵	平野柰平	大久保嘉一	加来七朗
朝比奈唯七	澤田清吉郎	伊沢虎彦	小関一二三
小寺始	古廐清太郎	唐澤弥市	粟屋延蔵
稲垣丈夫	三木一	矢島藤太	浦野源吾
川江宗三郎	小宮篤志	徳永藤次郎	湊甚左衛門
縫谷彦太郎	赤松半	豊島秀夫	三沢平次
田中三郎	井上修	須田重平	榑原権平
林昇三郎	加藤守三郎	中島小一	恩田叔蔵
柳瀬紋右衛門	伴弥茂里	松室愈太郎	平澤森
竹内恒三郎	三島勇	有馬幾太郎	三沢小四郎
木村源治	佐藤文三郎	渡辺省三	井上真夫
長竹峯三郎	高橋平吾	木部茂	高山幾衛
杉生琢磨	大西武次郎	大場克巳	中村柰衛
鍋山弥四郎	上原直三郎	松本竹三郎	山野井富佐槌
森徳次郎	木下文三郎	飯森小太郎	小島八郎平

西川八郎	中島勇三郎	澤田衛門吉朗	松井源三
柳田直樹	山内十朗	山下珠江	三井八郎
増田市太郎	虎澤弥五七	辻市太郎	上田邦次郎
相羽熨斗勝	川上甚吾	赤木甲子夫	宇野弥平治
竹田文治	小島琢蔵	島村十朗	野間勝彦
伊川郁蔵	宮崎弥一郎	加藤海蔵	志津野群造
村岡馬衛	稲田四郎治	山本弥七朗	野沢勝太郎
渡辺権四郎	小西市太郎	小島小源治	鳥羽千寿
大村権六	山田歌槌	池田三郎	山口九蔵
木島乙次郎	小牧半	立野亀十朗	多々井作平
井上清三	大束可平	堀江増太郎	渡辺養蔵
上原栄蔵	横山源三郎	小石巖	木下徳衛
木村淳太郎	小住接太郎	坂輝記	岡源吉
川上何七	金田鉄太郎	野口佳六	木村新九朗
吉田唯江	塩三幾太郎	金生富槌	馬場常三郎
伴勘吾	小原藤次郎	榎原平三	松永穀司
加藤寅五郎	宗衛茂七	飯田所平	矢部鉄蔵
岡村啓太郎	進三春	茅野源三	長田小武者
小田謙次郎	川村荒九朗	徳岡喜久蔵	村上其直
永井貢	早川伝次郎	濱島彦三郎	瀬川一郎
大村勇	岩崎甚蔵	金子歆太郎	安藤常三郎
岡部六蔵	吉村破疑六	安村猛太郎	米山弥三郎
柏原権三郎	木村嘉平	柳田莊司	高木悦蔵
宮田小文吾	吉沢勝三郎	田辺武男	井上三次朗
丸山茂	斎藤蘇平	田中助三郎	宇津木藤五郎
柴田七朗	魚住伴平	在川安次郎	徳原弥平治
白石五郎	西村五平	湊弥平	和田藤太郎
是則武平太	市岡岩太郎	佐々木源三	山田忠吾
新森李太郎	松島五郎次	松島清三	布施匡雄
山田周蔵	田代大八	松村勝太郎	中村弥平
土屋虎夫	高竹生一	湊勇蔵	高橋益
松本文四郎	土岐逸作	紫藤市蔵	秋山伝平
福村栄司	中野国次郎	倉谷一三	今井齡太郎
満井清	盛田喜平	中村半弥	亀田忠三郎
梅田栄四郎	小野壮七	恒成正蔵	松本源内
上田寛治	関理久蔵	岩田辰彦	内田茂太郎

白石庸	重松辰藏	松尾壮三郎	井上勇太	中村又造	野口平次郎	山口安三	林国藏	手島恒三郎	木村孫太郎	森橋彦次郎	上田丹藏	入江栄三	新井唯七	池田肇	前川穀三太	今井東太郎	脇田重太	村岡熊次郎	木村考作	高橋健九朗	上野栄造	竹内文太郎	宮川勝藏	福島須賀造	吉川権四郎	高島光太郎	徳田利彦	小川栄造	田邊守衛	木本兵司	山田良七	清澄温藏	松本二郎	片村朔太郎	林太次郎
蔭山昌藏	有吉伴藏	川本来輔	塩三栄三郎	島田有年彦	小川次郎太郎	谷頭文藏	川村岩七	甲斐重作	石田利三	吉田勘造	林平太	高野甚次	林十藏	今井八十八	田中兵三	五味幾藏	林文三	金川達三	小寺萬次郎	磯谷又藏	遠藤俊藏	須田宇宙太	松田九十九	堀権藏	青柳筑摩	宮田保身	有馬猛治	島田興八郎	三井省	藤田又藏	平野穀藏	緒方丈三	山川孝太郎	田中長三郎	吉村弥平太
遠藤半造	宗弾藏	坂田弥平	高竹栄	大城戸隆藏	遠藤恒太郎	浮州又藏	島田才次郎	山田友藏	緒田重治	川村祐平	甲斐藤太	高野四郎治	川口米次郎	田中理三太	蔵谷与四郎	永尾環一	入江勝馬	田中宗三	川島三喜三	百々千万太	丸谷勇四郎	川島東作	岡村源三	上田稔	加来正司	今井徳次郎	菅田徳造	土岐三四郎	島田勝馬	佐藤一	中村誠藏	田中勇三郎	溝部壽太郎	島田省一	桑野一郎
岡村幾次郎	岩田作太郎	松井斌三	三宅七十郎	金田雄太郎	楠村貴一	松尾宣一	水田弾四郎	岡村守衛	岸本惣三郎	橋本徳藏	森友七	高野安太郎	林清次郎	桂海三	小川保	矢野又吉	今井東太郎	入江源七	橋本越	中川孫七	青木正三	永野清造	上月紋藏	内田文藏	川崎満五郎	篠田修吾	寺山九朗治	木村鈍六	岡村熊太郎	和田幾造	原田弥太郎	安藤文三郎	西川長三	内田守彦	森山斧彦

皆川友平	宮口久治	市村閑藏	山田逞司
中村伝	内田五平	中居直藏	古賀節藏
中村作次郎	三浦平藏	福田平四郎	並河七朗
神崎平馬	有松千秋	常岡庄藏	上原半太
雨森甚藏	高橋信六	松室半平	井上徳作
池田勘藏	川崎茂藏	小出平吾	上村力藏
大束今衛	古賀幸三	椎橋応喜	有光清三
山田九八	松本喜六	藤井嘉内	上田慶藏
徳永力太郎	野村健藏	伊川章一	鶴田義三郎
山田徳太郎	木下茂平	城戸秋三	白根孫七朗
小林勇三郎	川本紋治	松本友次郎	有賀文次郎
中村祥藏	森友平吾	小西又七	櫛木冶務造
田村清三	唐生栄三	宮下元造	有賀又三
柴田平太	中村幾七	檀原魁三	柳瀬 算
佐藤謙二	鬼頭幾次郎	中村理久藏	西村昇吉
福江孫九朗	津田幸藏	小森完三	本吉一策
檀原甚造	山田甚造	宮田幾太郎	久保田市平
丸谷庄七	向井彦三	坪根弁治	人見治平
田見茂	恩田定友朗	中村幸藏	平緒勝太郎
三井重平	酒井平次郎	江良友三	福田昇三
白石傳次郎	金子角三	井上俊藏	加藤辰三
青木直藏	藤井昇平	石坂開造	中村平次郎
熊谷直候	川島一二三	田中彦次郎	植森初五郎
林吉朗	森下保三郎	高木健藏	大森正
西川類藏	松本類吉	丹村次郎	山添喜藏
松尾圓三	植木益太郎	富久潤三	玉江喜平
小今井助九朗	柏木勘八郎	太田半次郎	佐藤次郎
山本太一	鶴見勝太郎	門田久馬	野村新十郎
綿貫益造	太田常次郎	井上甚三	安藤閑六
大石周藏	富村又八	中尾直治	小林茂三
是石林藏	末吉脩三	高村庄吉	中村半藏
高尾立藏	遠藤治平	伊藤銀平	岡村惣平
上原紋藏	財津五郎	財津三司	添島平七
徳永要藏	山中周雪	早川種七	高島傳藏
中村孫藏	井上縫藏	早川為七	高島平藏
野村生三郎	秋吉繁三	古賀順藏	藏本重内

原田貫藏	古賀簾太	神吉保藏	大積新吾
柳井源三	長井齡造	田邊文太	小住再藏
井生賢吾	刀根栄藏	畑太郎三	原田新
有馬弾藏	柳田省三	青柳蔵六	安藤太平
我有伴藏	池田六平	上田藤三郎	島田勝三
在川良平	藤本可平	木村迂七	岩村清三郎
林可平	青柳五郎三	堀 与三	狩野隼太
柏木三郎	葉合喜平治	熊井作太郎	松本彦次郎
遠山高次郎	竹林甚六	福田米蔵	小野直三
小山 普	木下登能夫	井澤鐵彦	斎藤美知彦
田中友彦	萩野丹治	川関司馬三	上田環太郎
吉村真雄	大野勝蔵	本庄寅次郎	依田幸太郎
児崎三郎	野田三郎	村田平吾	穴生久治
岩崎虎槌	高橋力造	高山治左衛門	吉田又十郎
今高小三郎	早川有太	宮崎藤次郎	加藤盛彦
田代政市	小井塚守三	岡本三郎	中川三郎
安藤永三郎	岡崎西平	今井栄	林田権蔵
前田十郎	森原護	菅田卓蔵	龜田平太郎
高木幸三郎	宮内文蔵	草野角次郎	中村平太
黒瀬要蔵	松本勝次郎	松室晨吾	七條祖平
津川藤九朗	村田虎男	松本退蔵	野村鉄吾
野村国槌	佐藤松太郎	山本辰次郎	小石定太郎
松島六治	松本勝馬	木下平蔵	矢澤鉄五郎
佐藤桃代	上田庄三郎	桜井泉造	松本大蔵
高山篤太郎	中村幹造	山田直七	岸本藤治
吉村幾次郎	松野清吾	在川武三郎	村上要蔵
佐久間文四郎	森島半六	山本國太郎	荒木小三郎
石川 隣	畑宗次郎	中村傳次郎	久保芳蔵
田代庄助	小林槌太郎	下村弥三郎	原田半次郎
柏原清馬	熊谷正司	高橋正斉	赤田嘉兵太
鶴田弥十郎	吉村与平	藤永勝次郎	本島市三
古田重朗	吉田八十喜	森山節三郎	大島一郎
安田興三太	山下三治	大下権太	梅田角三
高木一蔵	内山 与	松田順蔵	林田武平司
小野茂七	松田林蔵	香堂栄蔵	富村圭三
田代周三	原田愛吉	吉田常次郎	林与四郎

大宮勇	安田幾七	林襲巳	加多上萬次郎
笠井九右衛門	吉川素一郎	松本虎彦	鶴田住藏
是則勝藏	藤江斧次郎	加来庫治	久野平七
川本六之丞	中村松治	高木市太郎	楠城逞
左村誠治	谷崎宗兵衛	次島百々鬼	植田八郎
古賀仙治	赤木義平	松本傳治	今井音吉朗
中村嘉七	松本熊太郎	進権平	桜木太郎
矢口次郎	野口源太	栗山嘉平	木村勝馬
疋田贖平	中村直藏	磯崎興三郎	後藤才藏
河井門弥	山県三郎平	島田昇三	青木庫一
山口巖	野間郡七	橋本源三	長谷川静次郎
宮本喜平治	古賀六郎	小村定五郎	白石孝比古
緒方嘉平太	木下文吾	小川義平治	高原勝七朗
酒井常三郎	佐藤乙次郎	元永権三郎	永末常三
中川雄五郎	満井守藏	宮崎恒太郎	林小三郎
上田専司	野木四郎二郎	榎原藤次郎	市場定八郎
柳瀬平藏	井村準藏	久保高彦	伊藤音次郎
斎藤喜十郎	丸山滝男	上村貫次郎	川合鋌司
永井三郎	盛久悦三郎	宮崎國太郎	平岡虎雄
大槻幾藏	西山信彦	末松富七	川本林藏
原口六郎	松田雄三郎	中村専藏	青柳菊三郎
山田房七	福永甚八郎	富永精三	梅田啓太郎
吉元傳藏	山田定太郎	棕原藤作	小出貴一郎
森原太久藏	中村省三郎	吉田権藏	山田又藏
重松夏次郎	平田繁次郎	山村仙治	片桐八郎
小林圓三	我有直次郎	村上才藏	谷頭正藏
岡治平	那賀澤英藏	西村善造	井口徳次郎
山村正九朗	木下市朗	絹笠 槌	平尾福三郎
田邊栄六	内田乙五郎	疋田雄五郎	久保米藏
喜久田勘六	有廣市三	代田孫三郎	武井恵作
西村権七	中村勝次郎	棕野武二	茂田半藏
松尾孫藏	宮生太平	小畑耕作	長野嘉重
永野熊太郎	金子鹿太郎	松村彦次郎	吉村喜三
老川富藏	木村悦弥	増田一郎	伊川弥太郎
松本勝二	長島久米藏	中居寛太郎	三木嘉平太
有馬勝三郎	佐野丈太郎	池田武次郎	尾形増太郎

原田宇平治	平尾彦五郎	高井三郎	麻畑弥平
石川雄藏	中村米藏	岩崎半太	上村源三
山与平太	神吉時右衛門	榎原来作	吉元藤太郎
後藤清藏	荒瀬小太郎	白石賢造	神崎一郎
永野勝藏	島田虎槌	長田祐吉	松井定藏
中村彦左衛門	松下專藏	早川猛夫	早川延太郎
前田寅雄	三澤正彦	矢野仙七朗	伊澤彦三郎
立野久次郎	瓜生卓弥	小森颯次郎	上田勝七朗
坂守記	遠藤省吾	中村愛之丞	魚住源三
大戸九朗	伊藤伍朗	初島治平	宮下春三
村田伝内	栗山友三	松本堪藏	柴崎長左衛門
石川伸太郎	田中太郎	川本林雪	小林半隆
大前玄斎	平尾俊栄	古賀源興	三木友甫
青木啓平	古川源藏	島山勝兵衛	濱口直藏
丹村晋藏	林田官藏	小笠原啓之助	三宅保介
山名春翁	中西種美	森島麿茂留	風間平四郎
外山 深	鶴島千年	進善得	浦橋興四郎
島田平太郎	江田蕃	安藤甫太	白河興太郎
中村勇六郎	今井定平	高木淳一郎	増田富盛
吉雄正安	柘植九一	崎田恭慎	西元朴
萩野恭伯	平田瑞庵	高崎廣吉	篠田蒼安
伴節庵	秋山養壽	竹中元甫	中山秀達
小川素澄	中山玄益	庄司精一	篠原乾藏
小口久五郎			

|

|

|

.

.

|

|

(

)

.

|

.

|

|

|



Vertical line segment

Vertical line segment

Vertical line segment

Vertical line segment

Vertical line segment

Two dots

Vertical line segment

Vertical line segment

Vertical line segment

Vertical line segment

Vertical line segment

Vertical line segment

Vertical line segment

.

.

.

.

.

.

.

.

.

.

.

(

)

.

]

]

.



(

)



.

.

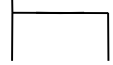
.

.



(

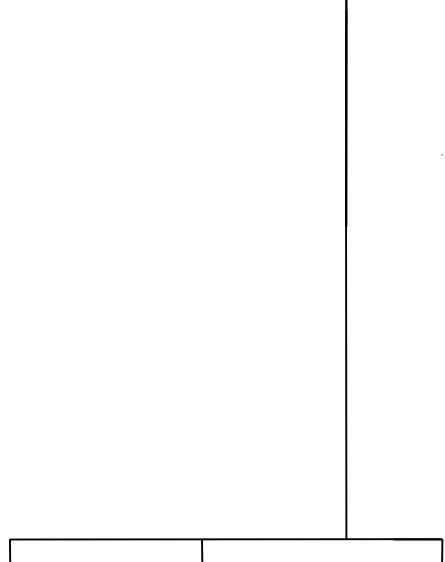
)



.

.

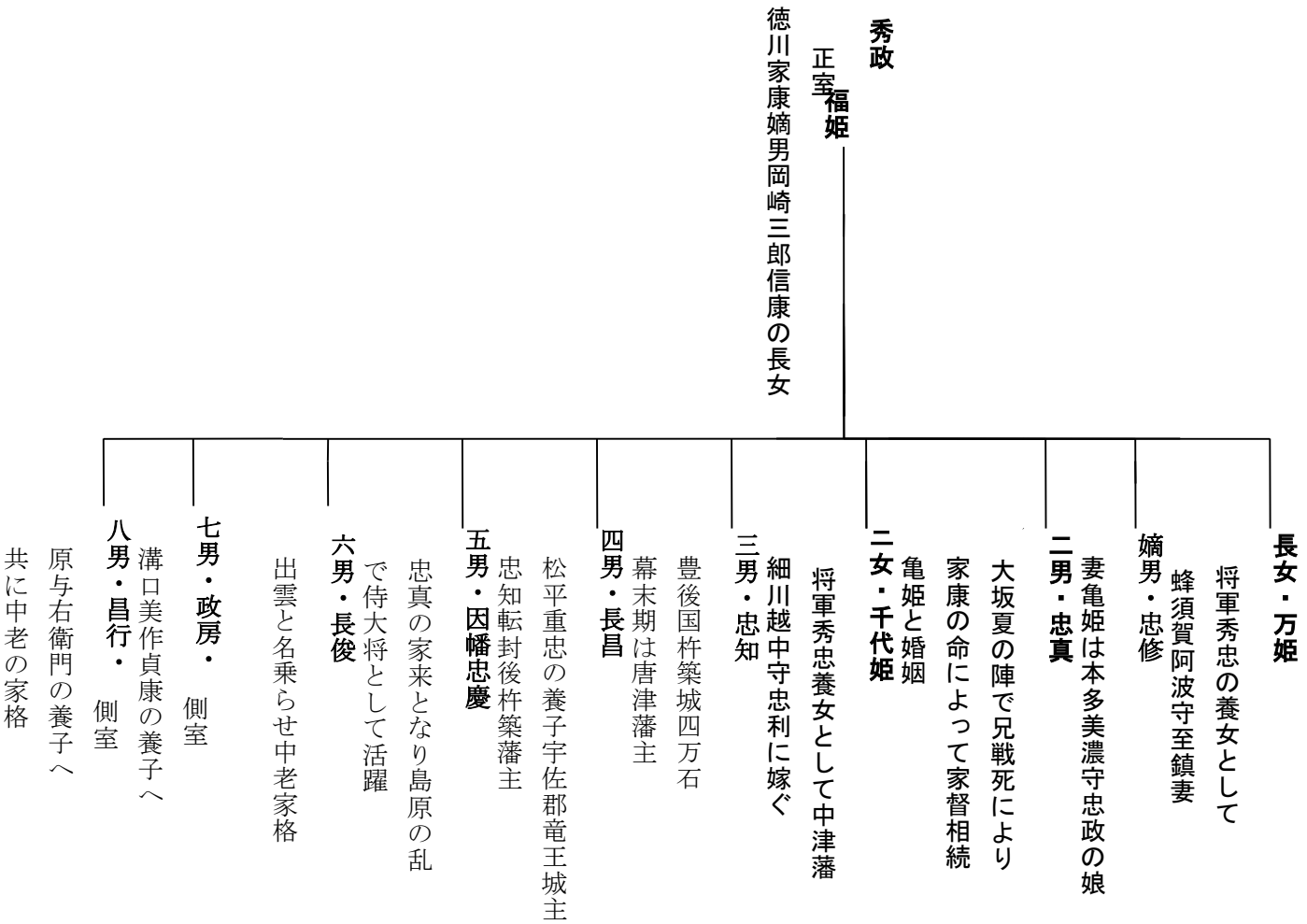




.

|

# 信濃小笠原家



明治になると豊津藩主家は伯爵、分家の唐津、安志、千束、越前勝山藩主家は子爵。